TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　619語

Pinocchio, Chapter 8

第8章　ゼペットさんの上着

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　新しい足を作ってもらったピノッキオは、学校へ行くと約束します。でも、ABCの本を買うお金がありません。そこでゼペットさんは……。



Geppetto makes Pinocchio a new pair of feet, and sells his coat to buy him an A-B-C book.

The Marionette, as soon as his hunger was appeased, started to grumble and cry that he wanted a new pair of feet.

But Mastro Geppetto, in order to punish him for his mischief, let him alone the whole morning. After dinner he said to him:

“Why should I make your feet over again? To see you run away from home once more?”

“I promise you,” answered the Marionette, sobbing, “that from now on I’ll be good—”

“Boys always promise that when they want something,” said Geppetto.

“I promise to go to school every day, to study, and to succeed—”

“Boys always sing that song when they want their own will.”

“But I am not like other boys! I am better than all of them and I always tell the truth. I promise you, Father, that I’ll learn a trade, and I’ll be the comfort and staff of your old age.”

Geppetto, though trying to look very stern, felt his eyes fill with tears and his heart soften when he saw Pinocchio so unhappy. He said no more, but taking his tools and two pieces of wood, he set to work diligently.

In less than an hour the feet were finished, two slender, nimble little feet, strong and quick, modeled as if by an artist’s hands.

“Close your eyes and sleep!” Geppetto then said to the Marionette.

Pinocchio closed his eyes and pretended to be asleep, while Geppetto stuck on the two feet with a bit of glue melted in an eggshell, doing his work so well that the joint could hardly be seen.

As soon as the Marionette felt his new feet, he gave one leap from the table and started to skip and jump around, as if he had lost his head from very joy.

“To show you how grateful I am to you, Father, I’ll go to school now. But to go to school I need a suit of clothes.”

Geppetto did not have a penny in his pocket, so he made his son a little suit of flowered paper, a pair of shoes from the bark of a tree, and a tiny cap from a bit of dough.

Pinocchio ran to look at himself in a bowl of water, and he felt so happy that he said proudly:

“Now I look like a gentleman.”

“Truly,” answered Geppetto. “But remember that fine clothes do not make the man unless they be neat and clean.”

“Very true,” answered Pinocchio, “but, in order to go to school, I still need something very important.”

“What is it?”

“An A-B-C book.”

“To be sure! But how shall we get it?”

“That’s easy. We’ll go to a bookstore and buy it.”

“And the money?”

“I have none.”

“Neither have I,” said the old man sadly.

Pinocchio, although a happy boy always, became sad and downcast at these words. When poverty shows itself, even mischievous boys understand what it means.

“What does it matter, after all?” cried Geppetto all at once, as he jumped up from his chair. Putting on his old coat, full of darns and patches, he ran out of the house without another word.

After a while he returned. In his hands he had the A-B-C book for his son, but the old coat was gone. The poor fellow was in his shirt sleeves and the day was cold.

“Where’s your coat, Father?”

“I have sold it.”

“Why did you sell your coat?”

“It was too warm.”

Pinocchio understood the answer in a twinkling, and, unable to restrain his tears, he jumped on his father's neck and kissed him over and over.

ゼペットさんはピノッキオに新しい足を作ってやり、自分の上着を売って、ABCの本を買ってやります。

あやつり人形は、おなかがおちつくとすぐに、新しい足がほしいと、ぶつぶつ言ったり泣いたりしはじめました。

けれどもゼペットさんは、いたずらのおしおきに、午前中ずっとピノッキオをほうっておきました。お昼ごはんのあと、ゼペットさんは言いました。

「どうしておまえの足をまた作ってやらなくちゃいけないんだい？また家出するところを見るためにかい？」

「約束するよ」とあやつり人形はしゃくり上げながら答えました。「これからはいい子になるって――」

「男の子は、何かほしいときはいつもそう約束するんだよ」とゼペットさんは言いました。

「毎日学校に行って、勉強して、りっぱになるって約束する――」

「男の子は、自分の思いどおりにしたいとき、いつもその歌を歌うのさ。」

「でも、ぼくはほかの子とはちがうよ！ぼくは、ほかのだれよりもいい子だし、いつも本当のことを言うんだ。お父さん、約束するよ。仕事をおぼえて、お父さんが年をとったら、ぼくがなぐさめになって、ささえてあげる。」

ゼペットさんは、とてもきびしい顔をしようとしていましたが、ピノッキオがあんまり悲しそうなのを見ると、目になみだがあふれ、心がやわらいでくるのを感じました。もう何も言わずに、道具と二つの木切れを取って、せっせと仕事にとりかかりました。

一時間もしないうちに、足はできあがりました。ほっそりとして身軽な小さな二本の足で、じょうぶですばやく、まるで芸術家が作ったような足でした。

「目をとじて、ねむりなさい！」とゼペットさんはあやつり人形に言いました。

ピノッキオは目をとじて、ねたふりをしました。そのあいだにゼペットさんは、たまごのからでとかした少しのにかわで二本の足をくっつけました。とてもじょうずに仕事をしたので、つなぎ目はほとんど見えないほどでした。

新しい足がついたとわかると、あやつり人形はテーブルからぴょんととびおりて、うれしさのあまりどうかしてしまったように、スキップしたり、とびはねたりしはじめました。

「どんなにお父さんに感謝しているか見せるために、ぼく、今すぐ学校に行くよ。でも学校に行くには、服がいるんだ。」

ゼペットさんはポケットにお金を一文も持っていなかったので、花もようの紙で小さな服を、木の皮でくつを一足、パンの生地で小さなぼうしを作ってやりました。

ピノッキオは水を入れたおわんに自分をうつしに走っていき、とてもうれしくなって、とくいそうに言いました。

「これで、ぼく、りっぱなしんしみたいだ。」

「そうだね」とゼペットさんは答えました。「でも、おぼえておきなさい。いい服を着ても、きちんとして、きれいにしていなければ、りっぱな人にはなれないんだよ。」

「本当にそうだね」とピノッキオは答えました。「でも、学校に行くには、まだとても大事なものがいるんだ。」

「なんだい？」

「ABCの本さ。」

「なるほど！でも、どうやって手に入れようか？」

「かんたんだよ。本屋さんに行って買えばいいのさ。」

「で、お金は？」

「ぼく、持ってないよ。」

「わしもないんだ」とおじいさんは悲しそうに言いました。

ピノッキオは、いつも明るい子でしたが、このことばを聞くと悲しくなって、しょんぼりしました。まずしさが目の前にあらわれると、いたずらっ子でも、それがどういうことかわかるのです。

「なあに、かまうもんか！」とゼペットさんは急にさけんで、いすから飛び上がりました。つぎはぎだらけの古い上着を着ると、何も言わずに家を飛び出していきました。

しばらくして、帰ってきました。手にはむすこのためのABCの本を持っていましたが、古い上着はなくなっていました。かわいそうに、ゼペットさんはシャツ一枚で、その日は寒い日でした。

「お父さん、上着はどうしたの？」

「売ったよ。」

「どうして上着を売ったの？」

「暑すぎたからさ。」

ピノッキオはその答えの意味をすぐにさとりました。そして、なみだをこらえきれずに、お父さんの首に飛びついて、何度も何度もキスをしました。

たんご と クイズ　第8章　ゼペットさんの上着

feet 足	**glue** にかわ（のり）	**school** 学校
paper 紙	**shoes** くつ	**cap** ぼうし
book 本	**coat** 上着	

Q1 ゼペットさんは、ピノッキオのぼうしを何で作った？

① パンの生地　② 花もようの紙　③ 木の皮

Q2 ABCの本を買うために、ゼペットさんは何を売った？

① 道具　② 自分の上着　③ いす

Q3 上着を売ったわけを、ゼペットさんは何と言った？

① 古すぎたから　② 大きすぎたから　③ 暑すぎたから

こたえ

Q1 ①　お金がなかったので、服は花もようの紙、くつは木の皮、ぼうしはパンの生地で作ってやりました。

Q2 ②　寒い日なのに、つぎはぎだらけの古い上着を売って、ピノッキオのためにABCの本を買ってきました。

Q3 ③　本当は寒かったのに「暑すぎたからさ」と答えました。ピノッキオはすぐにその本当の意味に気づきました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。